

『平家物語』は叙事詩か

—— 対比論的に ——

日 下 力

日本がヨーロッパの文化的影響下に入った明治以来、『平家物語』は、わが国にもあった叙事詩として、長く位置づけられてきた。それゆえ、日本民族の勇武をたたえる国民文学ともされて、他国への戦意をおおる一素材となり、第二次世界大戦の敗戦後は、新しい時代を切り開いていった、かつての新興階級のたくましさ⁽¹⁾に重点を置いた叙事詩論も、展開されたのであった。⁽²⁾

確かに、語り物として広く享受された歴史的物語という形態は一致する。が、その内実は、ヨーロッパで言うエピックなる作品群⁽³⁾に含めてよいか、はなはだ疑わしい。従来、同一範疇にくくろうとする姿勢が、たとえば合戦譚を優先して分析評価するという形で、作品の本質を見誤らせて来はしなかったか。

エピックの原義は、韻文によって話を語ることで、本来、戦いの文学と直結するものではなかった。しかし、近代に至り、文学ジャンルを表示するものとなつてからは、ある歴史的な、民族全体の浮沈にかかわるような伝説的な事件において、英雄的働きをした人物の行動を韻文で語る文学、を意味するようになる。当

然、わが国もその概念のもとに叙事詩を受け容れたことになる。こうした点も踏まえて、考察を進めてみたい。

(一) 叙事詩における年齢の不問

叙事詩と言えば、紀元前八世紀のギリシャでホメロスによつて作られたという『イリアス』『オデュッセイア』、同じく前一世紀のイタリアにおけるウェルギリウス作品『アエネーイス』、下つて十一、二世紀のころ、フランスで成立した『ロランの歌』、十二世紀末にロシアで書かれた『イーゴリ遠征物語』、十三世紀初頭のドイツで出来た『ニーベルンゲンの歌』などが知られ、邦訳されて出版されている。

これらのうち、『オデュッセイア』は、戦いの物語というより英雄の遍歴譚で、日本の軍記物語と比較するのには必ずしもふさわしくなく、『イーゴリ遠征物語』も、内容はストーリー性に乏しいイーゴリ侯の讃歌とでも言うべきものとなっているため、以後の考察対象からはやや遠のくことになる。

まず、軍記物語に慣れ親しんだ目で西欧の叙事詩を通読して奇異に感じるの、登場人物が何歳で死んだなどの年齢が、いっさい記されていないことである。イーゴリは、一一五一年生まれで、没年は一二〇二年、出征したのは三十四歳の時で、当時の妻の年も十七歳と分かっているが、作中にはそれが記されない(岩波文庫による)。戦争後、二十年に満たずして成立したとされる作品においてすらそうである。年齢記述の有無は、その人物の実在感を左右しかねない。

たとえば、『ニーベルンゲンの歌』では、年齢を不問に付した結果、大きな表現上の矛盾をきたしている。前篇の主人公は英雄ジーフリトで、ブルゴント国から王妃クリエムヒルトを迎えるまでの武勇譚が語られているが、そのジーフリトは、国王として自国を統治すること十年にして、王妃の国に招かれ、暗殺される。後篇では、未亡人となったクリエムヒルトが、十三年間の貞節を守ったのち、后を失ったフン族の国王のもとに再嫁し、夫を殺したブルゴント国の一族を招待して、ことごとく討ち果たしてしまう経緯が語られていく(岩波文庫による)。彼女は再婚して七年目に王子をもうけ、十三年目に恨みを晴らす計画を立てたことになつており、ジーフリトと結婚してからは三十六年が経過していた。仮に十四歳で結婚したとすれば、五十歳に達していたはずである。

さて、ジーフリト暗殺の張本人は、ハゲネなる人物で、彼はクリエムヒルトから激しい恨みを買い、王宮で繰り広げられた戦いの標的とされながらも、先頭に立つて最後まで戦い抜く。一族郎

従の死に絶えたのちも彼とともに剣を振るつたのが、クリエムヒルトの兄グンテル。ということは、グンテルは五十歳を越していたことになる。そもそもハゲネは、グンテルたちの叔父に当たっており、年齢はさらに上だったはず。しかし、彼らの獅子奮迅の戦いぶりからは、とうてい老齢の人物たることなど、想像できない。さらに、クリエムヒルトの弟ギーゼルヘルは、作品の初めから登場しているが、三十六年後まで「若武者」として描かれ続ける(第三十歌章)。奇妙な記述と言わざるを得ない。

『イリアス』の主人公アキレウスは、ギリシャ軍の総帥アガメムノンと対立して戦闘参加を拒否するのであったが、その年齢はアガメムノンよりはるか下で、九年前に故国をあとにした時には、「まだ年もゆかず」、戦いにも不慣れであつたと語られている(第九歌。岩波文庫による)。彼の出征前に生まれた息子ネオプトレムスは、当時十歳そこそこであつたはずであるが、しかし父亡きのちの翌年、敵のトロイア王を殺害した姿が描かれる『アエネイス』では、りっぱな青年に達している(第二歌。西洋古典叢書による)。おそらく、アキレウスの参戦と子供の誕生とが深く結び付けられた伝承と、トロイアを滅亡させた彼の武功譚とが、別個に年齢を意に介さぬ形で伝わっていたのであろう。

人物の年齢を記さぬことは、軍記物語のように、事の起こった日付を、何年何月何日というふうに記さないことに通ずる。ホメロスやウェルギリウスの語る世界は、人間と神々が相交わるはるか古代の非現実的世界、『ロランの歌』は、西暦七七八年八月十五日の事件を扱ったものではあるが、作品成立時とは三、四百年

前後の差がある。『ニーベルンゲンの歌』は、四三七年の、フン族の攻撃によるブルグント族の滅亡という史実を取り込んでいるものの、それも八百年近く前のことに属する。日付が書かれないのは、過去との歴史的隔たりが大きいためとも考えられるが、先述したように、事件後まもなくの成立になるらしい『イーグリ遠征物語』にも、日付はない。どうやら叙事詩にとって、年齢や日付は、たいした問題ではなかったように見える。

一方、軍記文学では、死んだ人の年齢への関心が高い。清盛は六十四、重盛は四十三、俊寛は三十七、などと記される。特に、若くして戦いの犠牲となった少年たちを哀悼する思いは、謡曲の「敦盛」や「朝長」で用いられる面が「十六」と命名されているところに暗示されているように、十六歳という年齢に象徴的意味を託するまでに至っていた。

さらに幼い子供たちを表現するのにも、年齢記述は不可欠である。『保元物語』では、命を奪われる源為義の遺児たちが「十三」「十一」「九つ」「七つ」であったと語られ、『平治物語』でも、常葉の三人の子供の「八つ」「六つ」「二歳」という年齢が繰り返される。『平家物語』では、殺された宗盛の愛児が「八歳の童」、生け捕られた時の維盛息六代の年が「十二」とあり、『承久記』は、初陣を飾って死んでいった伊賀光季の子寿王を「十四」と語る。

そもそも叙事詩においては、少年や幼児の登場が少ない。その中で、トロイアの英雄ヘクトルが、愛妻アンドロマケとの間にもうけた赤子と最後の別れを惜しむ『イリアス』の場面は、よく知られているが（第六歌）、子供の年を強調する文はない。『オデュッ

セア』で、父の帰還を待つテレマコスが、一人前になる前の軟弱さが描かれるものの年齢不詳、比較的多く少年を登場させる『アエネーイス』でも、将来のローマ帝国建設につながる重要人物アスカニウスすら、同様である。『ニーベルンゲンの歌』では、クリエムヒルトの生んだ王子が戦闘突入の血祭りにあげられるが、六歳だったはずながら、そこに同情的な文言は見出せない（第三十三歌章）。戦いによって苦難をなめさせられ、あるいは犠牲となつた若い命への意識が、全体的に希薄と思われるのである。

年齢や日付にこだわるか否かは、歴史的現実を写そうとする姿勢の強弱に関わろう。軍記物語は、毛頭、事実そのものを忠実に語ろうとするものではなかった。とはいえ、戦いのもたらした結果が、どのようなものであつたかを伝えようとする思いは強い。歴史的に生き死んでいった人々の実人生に、いわば寄り添うような表現が試みられている。

それに対し叙事詩の場合は、戦いにおける男の勇武と克己的精神とを語ること、つまり精神を鼓舞することにこそ主眼があり、実在した人物の生と死をとらえようとする視線が、本来、乏しいのではない。それが、年齢や日付を不問に付すあり方に、象徴的に示されているのであろう。軍記文学と叙事詩とは、現実への対応の仕方が違っているのである。

(二) 不条理性の認識

『平家物語』の重衡は、犯す意思なくして犯した南都炎上の罪を背負わされることと、功績の大なる平家が一代のみで滅びるこ

との非を弁じつつ、しかし古代中国でも、正者たる名君が報われなかった例もあると、達観の境地を頼朝の前で披瀝していた。正しい者や力ある者が勝つとは限らぬ不条理な現実が語られていたのであるが、叙事詩の中でその不条理性を、神々の理不尽な思惑に結びつけて強く意識しているのが『イリアス』である。

『イリアス』中の神々の世界は、まるで人間社会の二重写し。泣き笑ひがあり、嫉妬あり、権力ずくの言動あり、権謀術数がある。トロイア戦争を過酷なものにさせたのは、アガ멤ノンの仕打ちに怒って参戦を拒否したアキレウスが、生母たる女神テティスに、味方のギリシャ軍が困難な状況におちいるよう、ゼウスへの仲介を依頼、ゼウスが彼女の願いを聞き入れたからであったが、そのことを察知した妻のヘレは、あなたは「悪賢い方」、いつも私に内緒で事を進めると、非難し始める。ゼウスは、私の考えをすべて知ろうなどと思うなどたしなめるが、ギリシャ側に肩入れするヘレは、あなたは「したい放題」のことをしてきたが、今回はテティスに丸め込まれた気がすると言ひ張る。ゼウスは、あまり詮索すれば、私の気持ちがお前から離れていくばかりで、いいことはあるまいと言ひ、最後はあらゆる神々に勝るおのれを誇示して、妻を黙らせる（第一歌）。

神界のことながら、ここには人界の夫婦喧嘩が再現された趣きがある。かつ、全能の神ゼウスを非難するヘレの口調は、ゼウスが必ずしも「正」の実行者ではないことを暗示している。実際に彼は、「思ひつき」で事を決める。テティスの願いをかなえてやるのに、彼は思案のすえ、アガ멤ノンに惑わしの夢を見させ

るのが最上の策と思いついたという（第二歌）、だまされた当人の恨みを買う（第九歌）。また、アキレウスの身代わりに戦場に出て奮戦する親友のパトロクロスを死なせる手順について、これも思案のすえ、ヘクトルらのトロイア勢を敗走させ、さらに多数の命を奪わせるのが上策と思いついたともいう（第十六歌）。

ゼウスは、誠に恣意的な神であった。テティスの願いは「過分」と表現されるが（第十五歌）、それを受け容れたこと自体、公正な判断とは言えまい。暴力的な力を恐れられながら、決して尊敬されてはいない権力者の姿が、写し取られている観がある。

神と人との違いは、不死なる存在と、死すべき存在との差としてものがたられ、その絶対的な差が、人界を見下す神の超越的な立場を保証している。再三描かれるゼウスがヘレと言ひ争う一場面では、人間界の「つまらぬ争い」を夫婦の不和の因にさせたくはないと、こともなげに人界の苦闘をさげすむ（第四歌）。実は、その闘争を人間にけしかけるのが神でありながら、彼らはそれぞれの屋敷で「のどかに座って」、高みから見物していたりする（第十一歌）。その上、ゼウスの場合には、神々までが戦闘に加わり激突しているさまを見て大いに喜び、「高笑い」をする（第二十一歌）。世に戦乱が尽きないのは、戦い好きな神（ひいては人そのもの）のせい、とでも言いたげである。

トロイア戦争の淵源は、ヘレ、アテネ、アプロディテの三女神が美を競いあったことにあったが、戦いの最中に、アテネはギリシャ軍の勇士に、アプロディテが戦場に出て来たら切りつけてもよいとそそのかす（第五歌）。ヘレは、トロイア側の優勢に戦況を

動かしている夫に業を煮やし、あくまでも自分の思い通りにしよう、夫を色仕掛けで眠らせ、その間に形勢を逆転させようとする（第十四歌）。しよせんゼウスにかなわぬとはいえ、神々は勝手な意思を持ち、それを人間界に押し付けようとする。

この世の不条理な現実とは、そうした、人と同じ性格を持つわがままな神々のなせるわざ、という認識が基本にあるからであらう、ゼウスは意の赴くままに、勇者から簡単に勝利を奪ったり、戦士に勇気を奮いたせたりするという、類似した表現が三回も出てくる（第十六、十七、二十歌）。アキレウスは、トロイア側に味方するアポロンの神にだまされたのを知って怒り、神は「気楽な気持ち」でそんな卑怯なことをするが、それはあとで仕返しされる恐れがないからだ、となじり（第二十二歌）、さらに、仇敵ヘクトルの遺体をもらい受けに来たその父のブリアモスに同情の念を示しつつ、神々は人間に苦しみつつ生きるよう仕向けたのに、自身にはなんの憂いもない、と批判している（第二十四歌）。理不尽な神に対する怨念が込められた言葉である。

しかし、神にも悩みがなかったわけではない。軍神アレスは、人間の自分の子が討たれなくやしさに理性を失い、その敵討ちにかけようとするが、アテネから、そんなことをすれば、ゼウスがわれわれ皆にどんな仕打ちをするかも知れぬし、もともと人間として生まれた子孫を守ってやるのには限界があるのだと説得される（第十五歌）。ゼウス自身、我が子が戦場で討たれようとするのを見て憐れみが増し、ここで救ったものか、死なせたものか、と、へレに相談する。へレは、すでに命運が定まっている者を助けて

は、他の神々も納得しまいと、それを受け付けない（第十六歌）。アキレウスに追撃されているヘクトルを見た時にも、ゼウスは同じ相談をへレに持ちかけ、峻拒される（第二十二歌）。

つまり、ゼウスにも思い通りにならないことがあったわけである。彼が「死の運命」を二つ、黄金のはかりに掛ける場面が二度ある。一度目は、トロイア勢とギリシア勢のそれをはかるため、後者が沈み、前者が浮き上がったことにより、トロイア側に有利になるように自らの力を発揮する（第八歌）。二度目は、アキレウスとヘクトルのそれで、前者が上がり、後者が下がったので、ヘクトルを守っていたアポロンの神も立ち去ったとある（第二十二歌）。はかりに掛ける行為は、自分の関知しない事実を知ろうとする行為を意味する。ゼウスの持つ能力の限界を語ろうとしていたことは、窮地におちいったギリシア軍のある人物に、たとえゼウスであろうとも、この戦いの流れを変えることはできない、と言わせているところにもうかがえる（第十四歌）。

結局、神にすらどうにもならぬ世界があることをほのめかしているのが、『イリアス』という作品であった。『平家物語』は、元来、不条理な現実のよって来たるゆえんを問おうとはせず、ただ現状の認定にとどまるが、それへの異議申し立てを強く打ち出す『イリアス』の場合は、神の恣意的なふるまいを描いて、可能な範囲で、その説明を試みたと言えるか。ともあれ、少なくとも世の不条理性を認識している点で、両作品は一致している。

ところが、『イリアス』より後出の叙事詩になると、それが希薄化していく。同じ紀元前の作品ながら、ローマ帝国全盛期に創

られた『アエネーイス』では、神に対する恨みの言葉は聞きがたい。トロイア戦争で敗れたアエネーアスが、イタリアに赴き新しい国づくりに挑むストーリー展開のなかで、主人公たる彼は、基本的に神々に守られ続けているからである。トロイアを滅ぼした神々の無慈悲を、アエネーアスの母神ウェヌス（アプロディテ）や彼自身も口にするとはいえ（第二、三歌）、手きびしく非難しているわけではなく、そんな過去より、建国が約束されている未来に向け、彼らの意思は傾注させられているのである。

その神によって約束されている建国の実現を、できるだけ遅らせ、執拗に邪魔しようとするのが女神ユーノ（ヘレ）。アエネーアスにとつての不条理な現実とは、彼女によつてもたらされるのであったが、それへの憤懣を彼が吐露することはない。非情な神に対しては、わずかに作者と、アエネーアスに挑戦するトゥルヌスとが、懐疑的な問いかけを発しているぐらいである。

まず作者は作品冒頭で、りっぱな人格の持ち主たるアエネーアスを、なぜユーノはこれほどの危険な目にあわせたのかと、神の心中をいぶかり（第一歌）、また、彼とトゥルヌスとの戦闘で多くの犠牲者が出たことを、これがあなたの意思であつたのかと、神ユピテル（ゼウス）に問いかけている（第十二歌）。

アエネーアスは、最終的にラティン人の住む地に至り、そのラティーンヌス王の娘と結婚して立国の基盤を築くことになるが、トゥルヌスは、その娘と先に婚約していた男である。女神ユーノは、ラティーンヌス王が神の神託を受け、わが娘とアエネーアスとの結婚を決意したのを知り、娘の実母で、トゥルヌスの親族で

あつた王妃アマータと、彼自身とに、アエネーアスに対する反発心を掻きたて、戦いを引き起こさせる。さらにユーノは、戦況不利な状況下でも最後まで彼を戦わせるために、当人の妹に当たる女神を派遣、戦いを誘導させる。その妹に対し、トゥルヌスは、いかなる神がお前を遣わして、このような苦難を引き起こさせたのか、と問う（第十二歌）。しかし、『イリアス』に比べ、不条理な現実をもたらず神と人間との相克という構図は、はるかに後退している。

『ロランの歌』は、異教徒制圧の物語であつた。主人公の英雄ロランは、義父ガヌロンの裏切りにより命を落とすが、その遺体は、天下つた聖者ガブリエルによつて天へ召しあげられる。非業の死を遂げたとはいえ、彼の「正」は報われるのであり、そこに不条理はない。

ロランは、味方のフランス勢のなきがらを前に、「偽り言い給いしことなき神」に、彼らを救つてくれるようにと祈り（第一四一詩節、自らの死に臨んでも、「かつて虚言^{いっや}言い給わざりしまこととの父」に、罪を謝してゆるしを請う（第一七七詩節）。キリスト教における神は、疑問を投げかけてよいような対象ではなく、正義そのものの。その正義による統一を世界に実現する聖戦のための献身的犠牲者は、物語の中で、天国への救済が約束されることにより、初めから不条理を訴える存在ではありえなくなっている。

『イーゴリ遠征物語』と、イーゴリ侯の事績を書きとどめている『イバーチイ年代記』（岩波文庫『イーゴリ遠征物語』付録）でも、キリスト教徒と異教徒とは峻別され、捕虜となつた彼は、主なる

神の意思によって逃亡を果たしえたと語られる。特に後者では、捕らわれの身となったのは、自らの不信心なかつての行為に、神の正しき裁きが下されたゆえと述懐し、その懺悔によって神の加護に恵まれたかのごとき記述となっており、因果の平仄が合わされている。

『ニーベルンゲンの歌』では、キリスト教徒と異教徒との優劣は意識されているものの、惹起された納得しがたい現実の説明に神は無関係で、人間の憎悪の念にその因が求められる。すなわち、フン族の国で殺されることになったブルゴント国王のグンテルと弟のギーゼルヘルは、自分たちになんのとがあつて、かくなる目にあうのかという問いを発するが、その答えは、夫を暗殺されたクリエムヒルトの執念深い恨みであつた（第三十六歌章）。つまり、現実はずべて説明可能なものとして語られるのが、『ロランの歌』をはじめとするこれらの作品なのであり、世の不条理性は、取り上げられるべき対象たりえていない。

現代の、光り輝くローマ帝国に結び付けて過去を語ろうとする『アエネーイス』では、主人公の度重なる苦難は描かれても、心理的葛藤や苦悩をそれほど深刻に描く必要はなかつたであろう。それに対し、トロイア戦争勝利後、他民族の侵攻にさらされて、四世紀にもわたる暗黒時代を経たのちのギリシャ復興期に創られた『イリアス』には、現代にまで結びつける意思はない。

両作品の相違は、アエネーアスとアキレウスが、それぞれ神に作製してもらい付与された盾の図柄に、象徴的に示されている。前者の盾には、イタリアの未来が、作者の仕えたローマ皇帝アウ

グストゥスの時代につながる戦いの歴史を中心に克明に彫刻され（第八歌）、後者の盾には、空や海、太陽や月などの自然界と、婚札や戦争、農村や牧場の風景などの人間生活全般が刻まれてあつたとあるのである（第十八歌）。一方は、強い国家意識のもとに叙述が統括され、他方は、それほど国家に拘泥せず、それゆえ、動揺する人間の心理を、より濃密に表現しうることになつたのである。

『平家物語』でも、国家意識は薄い。戦いが国家間や民族間の闘争ではなく、内戦であつたからに他なるまい。限られた視野であつたからこそ、逆に現実の不条理に対する認識が深められ、登場人物のそれを告発する言葉に結実したと見てよからう。他者の否定につながる国家・宗教等々の絶対基準を作中に持たないことが、より広く、かつ深い共鳴をうる文学作品となりうることを、『イリアス』と『平家物語』は示唆しているが、残念ながら叙事詩の歴史は、それと逆方向に進んでいったようである。

(三) 通底するもの

いくさの物語は、死を覚悟した男たちのいさぎよい生を描くことで、多くの人気を博してきたと言つていい。そうした中で、特に男どうしの死を賭した厚い友情が、人々の感動を呼んできた。『平家物語』では、木曾義仲と今井四郎兼平との関係がよく知られ、高く評価されている。叙事詩の中では、『イリアス』のアキレウスとバトロクロス、『アエネーイス』のニーススとエウリュアルス、『ロランの歌』のロランとオリヴィエ、といった例が代

表的なものであろう。これらを読めば、確かに共通する側面のあることは否めない。

パトロクロスは、戦争参加を拒否しているアキレウスの身代わりとして戦場に出、奮戦のすえにあえなく命を落とすのであったが、それを知ったアキレウスは、激しい悲しみの懊悩に襲われ、心配して現れた母神テティスを前に死への願望を口にし、神界からも人の世からも争いがなくなればよいと言いつつ、その争いを生み、自らの分別をも狂わせてしまった「怒り」という感情もなくなるよう願う（第十八歌）。にもかかわらず、以後、彼は狂気のごとき怒りにまかせて、親友の仇を討つべく敵陣に襲いかかり、あまたの命を奪う。命乞いする相手には、パトロクロスが死んだからにはひとりも許さぬと宣告して、非情の剣を振るう（第二十一歌）。それは、遠からぬ自らの死も、運命として母から知らされていたからでもあった。

彼の目ざす相手は、パトロクロスに止めを刺したヘクトル。そのヘクトルを討ち果たすや、亡き友を思い出し、遺体を戦車にしばらくつけて引きずるという暴挙に出る（第二十二歌）。盛大なパトロクロスの葬儀のちもなお、彼の悲しみはいやされず、眠れぬ夜をすごした朝には、また遺体を戦車に結びつけ、友の墓のまわりを三度まで、引きずり回す。

ついに見かねたゼウスが、母テティスにわが子を説得させ、ヘクトルの遺体を、その父プリアモスに返させる算段をつけるが、息子の遺体を請い受けに來た哀れな父親の姿に接したアキレウスは、自身の父を思い起こし、お互いの不幸を思つて共に声をあげ

て泣く。人間に「苦しみつつ生きるように運命の糸を紡いだ」なんの愛いもない」神を、半ば呪いつつ（第二十四歌）。いわば、不幸を共有する人間という存在に想念が及んだ時、ようやく彼の怒りは収束したのであった。前述した、不条理なる現実を意識した表現である。

ニースとエウリュアルスは、アエネーアスに仕えていた青年と、まだ十代半ばと想定される美少年である。アエネーアスが協力を求めて隣国へ赴いている間に、トゥルヌス軍に包囲されて籠城を決め込んだトロイア軍の中にあつて、ふたりは主君に急を知らせるべく包囲網を破つての脱出を試みる。当初、ニースは、与えられるべき報酬をすべてエウリュアルスのために約束させ、ひとりだけで決行するつもりであつた。が、相手から強く同行を求められ、なお、将来のある身は生き残つてほしいし、万一の場合は自分の葬儀も営んでほしい、ましてここまで同行してきている母親がお前にはいる、と説得したにもかかわらず、少年の決意は変わらず、ふたりでの行動となつたのであつた。

夜陰にまぎれて、ニースは泥酔して眠っている敵を次々に討つが、新たに到着した部隊に発見される。自身は逃げ延びたものの、エウリュアルスのいないのに気づき、取つて返そうとした耳に聞こえてきたのは、生け捕られた愛する少年の叫ぶ声。彼は二本の槍を放ちふたりを倒すが、どこからとも分からね槍にたけり狂つた敵の隊長は、エウリュアルスを襲い、剣を突きたてようとする。我を忘れて飛び出したニースは、悪いのは自分、その男は何もしていない、ただこの私に忠義立てをしたのが間違つてい

た、と叫ぶが、時すでに遅く、刃は少年の身体を貫く。彼は敵陣の真ん中に突進して隊長を討ち倒し、自らも少年の上に折り重なるようにして命絶える。こののち、事の次第を知った母親の、わが命を奪えと泣き叫ぶ半狂乱の姿が語られていくが、このふたりは、お互いに心が通じ合っていたがゆえに起きた悲劇として、ものがたられている（第九歌）。

ロランとオリヴィエの場合は、最後まで共に戦い抜いた戦友。

義父のわなにはまり、帰国するフランス軍のしんがりを務めることになったロランは、峠越えの難所でスペイン勢の大軍に急襲される。オリヴィエは、丘の上から数知れぬ敵部隊を目撃し、先行する本隊に知らせるべく、角笛を吹くよう、三度にわたりロランに求めるが、恥を重んずるロランは、それを頑強に断る。「ロランは勇ましく、オリヴィエは賢し」の一句が、ふたりの対照的性格を示す（第八八詩節）。友のかたくな態度に、ついにあきらめたオリヴィエは、決死の覚悟で勇士らを励まし、戦場へと向かう。度重なる激戦のすえ、味方六十人を残すのみとなった段階で、ロランは角笛を吹こうとし、オリヴィエにその是非を問う。オリヴィエは、自分のすすめに従わずして今の事態を生んだからには、更なる恥の上塗りには及ぶまいと強く反対し、相手をなじる。一方では、友の血だらけとなった両腕を気にしつつ（第一三〇詩節）。

ふたりの口論をとりなしたのは共に戦っていた大司教、その言葉にうながされてロランは角笛を唇に当て、弱った身体で口から血を流し、頭のこめかみが破れるまで吹き続ける（第一三五詩節）。

それを聞いたシャルル王は、急遽、本隊を引き返させるが、それはすでに遅きに失していた。

再開された戦闘の中で、オリヴィエは重傷を負う。それでも戦い続け、ロランの名を呼び、最後の別れを告げようとする。瀕死の友のありさまを目にした彼は、激しく動揺して馬上で失神、視力を失っていたオリヴィエは、近づいた相手をそれとも知らず、切りつける。兜を割られ、我に返ったロランは、やさしく自分であることを告げ、その行為をゆるす（第一五〇詩節）。相互の深い愛情を確認したのち、オリヴィエは神に祈りつつ息をひきとるが、あとに残されたロランは、哀悼の言葉を手向けながら、再び意識を失う。シャルル本隊の反撃を知ってスペイン軍が逃げ去ったあとも、友の遺体を見出した彼は、悲しみに耐えられず、三たび気絶する（第一五二詩節）。ふたりの間の衝突と、心の真の交流とが、みごとに起伏をなして織り成されているのである。

戦争が男のもので、しかも生死をかけたものであってみれば、戦場に散った男たちを無垢な姿に描きあげようとする志向性は、戦いの文学において洋の東西を問わぬものであったと理解できよう。

（四）異質性とその根源

通底するものを持ちながら、叙事詩と軍記物語とでは、現実によつてもたらされた苦悩をどれほど語ろうとしているかに相違がある。同じ親子の情に目を向けてみても、我が子に殺される『保元物語』の為義や、娘婿の助命嘆願を通して、子ゆえに悩まねば

ならぬ親の立場を口にする『平家物語』の教盛に通ずるような、複雑に揺れ動く子への思いは、叙事詩に見出しがたい。たとえば『ニーベルングンの歌』で、クリエムヘルトが先夫ジーフリトとの間に生まれた王子との再会を望みもせず、新たにフン族の王との間にできた王子が戦いの血祭りにあげられても、その悲嘆が全く描かれないのは、軍記物語では考えられないことで、そこに明らかな異質性がうかがえよう。

そうした中で、『アエネーイス』は、親子の縦の系譜が意識され、作品の重要な要素となっている点、源氏政權誕生への流れを念頭に置く改作後の『平治物語』に、一脈、通じはする。

『アエネーイス』では、アンキーセス、アエネーアス、アスカニウスの親子三代が語られる。もちろん、中心はアエネーアスで、老父アンキーセスは、イタリアへ赴く途中で落命、まだ少年であつたアスカニウスに将来の夢が託されるが、この作品の特異性は、未来に対する予言が、実に二十近くも散りばめられていることである。最初はユッピテル（ゼウス）によるもので、アスカニウスが国王となり、その三百年後の子孫ロームルスがローマ帝国を建設し、さらにアウグストゥス帝が世界に君臨している現代までを見通して語る。アエネーアスを迎え、いったんは戦いを余儀なくさせられるものの、その後、手を結ぶことになる現地人のラティヌス王にも、神託として予言が示され、最後はまたユッピテルが、両民族の結合により新たな一民族が誕生するであろうと予告する。展望される未来は、あくまでも明るい。そのせいか、親子の情も、『平治物語』の義朝に描き込まれた、頼朝への悲壮

な愛とはほど遠く、比喩的に言えば、自然な陽光のもとに描き取られている。

『平家物語』の知盛は、我が子の知章の犠牲によって生き延び、自身の命への執着を深く恥じつつ、命は惜しきものという人間共有の心の裏面に思い至るのであつたが、『アエネーイス』でも、我が子に助けられた男がいた。悪逆無道な行いによって自国の王位を奪われ、トゥルヌスのもとに逃げ込んでいたメゼンティウスである。アエネーアスが、槍で負傷させた彼に切りかかろうとした時、子のラウススが命を投げ出してまわりつき、父を逃がしたのであつた。執拗な抵抗に耐えかねたアエネーアスは、ついにラウスに剣を突き通すが、その孝心を愛で、かつ憐れむ。

逃げ延びたメゼンティウスは、我が子が自分の身代わりになろうとしていた時、おのれは命惜しさに心が占められていたのか、人々から憎まれている我こそ死ぬべきであつたと自らを責めるが、やがて死を覚悟し、傷を負った身でアエネーアスに戦いを挑み、討たれていく。死に臨みアエネーアスに頼んだことは、憎悪されている我が身を土で隠して人々の怒りから守り、我が子の墓に共に埋めて欲しいというものであつた（第十歌）。創りあげられた彼の否定的性格ゆえであろうか、ここには、知盛の告白に見られたような、人間のありようの根源にまで連想が及ぶ、深い苦悩はない。

『平家物語』は戦乱終結から五十年ほど、間近にあつた承久の乱からは十数年にして形を成し始める。戦争体験者たちが生き残っている時代であつた。知盛の告白には、そうした人々の共通

した思いが凝縮されて表現されていると考えられたが、子に裏切られてもお子の将来を案ずる為義や、子供の有り無しが良いか悪いかを心中で問ひ直す教盛、また、子らのために一身を投げ出す常葉の造型にしても、人々の身近な悩みと無縁ではなかったであろう。戦場における男どうしの心の強固な結びつきを感動的に語る点において、軍記物語と叙事詩は軌を一にしながら、この世に生きることの煩悶にどれほどの視線を及ぼしているかに関しては、明瞭な差があるのである。

勝者も心の傷を負うのが戦争の現実であり、それをものがたっているのが、『平家物語』の、教盛を殺した熊谷直実の話であった。殺したくもない相手を殺さざるを得ない、そのような現実を、はたして叙事詩は語っているのだろうか。アキレウスは、命乞いする相手を、いっさい容赦しなかった。パトロクロスの復讐に燃え、敵への憎しみは尽きない。『イリアス』の場合、したくもない戦争をし、殺すこともない相手を殺させるのは神の仕業、とする視点が用意されており、それが、自責の念に駆られる熊谷的人物を登場させないですんでいる一因のように見える。他の叙事詩の中では、『ニーベルンゲンの歌』が、殺したくもない相手と対決を強いられた人物の苦悶を取りあげてはいる。

ブルゴント国の国王一族は、フン族の国王と再婚したクリエムヒルトに招かれ、その地で全員殺されるのであったが、フン族の国への案内役を務めて彼らに礼儀を尽くし、かつ、自分の娘を国王の末弟に嫁がせる約束を交わしていたのが、リュエデゲールなる人物。かつて、クリエムヒルトを迎えるためにブルゴント国へ

出向き、彼女に生涯の忠誠を誓った身でもあった。頑強に抵抗する国王たちを討つようクリエムヒルトから求められた彼は、二律背反に苦しむ。誠実な性格ゆえに相手側からも信頼されていた彼は、その要請を拒みきれずに戦場へ赴き、国王一族の母国への無事帰還を念じつつ、壮絶な戦いのすえに、自らが贈り物として与えた剣の先にかかり、国王の次弟と相打ちして果てる（第三十七章章）。

熊谷との違いは、武家に生まれなければ、こんなつらい思いをしないですんだものを、という、自らの出自に対する否定的懷疑を抱くに至ったか否かの一点に尽きよう。リュエデゲールには、人の命を奪うことへの道義的罪悪感がなく、おのれを責める思いもない。作者は、高潔な勇士が、他者に誠実であるがゆえに不幸な状況に追い込まれ、それでもよりしく戦って死んでいく、その悲劇性を語れば充分であったのだろう。

叙事詩に熊谷の人物が登場しないことの意味するところは、大きい。心情の世界に、現実の戦争体験が懷疑的な形で投影されているかどうかに関わるからである。結局、叙事詩は、男の勇武と逆境の中で戦いぬく克己的精神とをたたえる韻律のポエムであったから、戦争の現実がもたらす心理的煩悶や懷疑などは歌う対象となりえなかったであろう。武勇中心主義は、笑いをも乏しくさせている。女性の描き方にしても、戦争被害者としての側面を強く意識している軍記物語との落差は甚だしい。

かく全体を見わたせば、『平家物語』を筆頭とする日本の軍記物語は、叙事詩と一線を画する文学作品と考えざるを得なく思わ

れてくる。無理に文学ジャンルの一範疇に加えるより、純粹にくさの物語として読む方が、作品の伝えたいところを真に受け止めることができるに違いない。

日本は、異民族や異宗教の人々と戦ったことがほとんどないという、幸運すぎる環境のなかで文化も文学も養われてきた。『イリアス』の語るトロイア勢中にすら、言語の違う異民族の存在が見え、『アエネーイス』で冥界の幸福の野に生を受けえたのは、ローマ帝国建設に結びつく人々のみ、他者は排除される。ほかの叙事詩でも、異民族・異宗教への意識が根底にあることは明白で、戦争がそれらの対立のなかで繰り返されてきた不幸な歴史を反映する。それゆえ、自らの属する集団を鼓舞する性格を、叙事詩は保持し続けたのであった。

鎌倉期に実を結んだこの国の軍記物語には、その意識がない。それが幸いして、多様な人間の姿態、世の実態を簡明直截に描く文学になったと言えよう。言わば体験世界の狹隘さと引き換えに、文学的深さを獲得したのである。

トルストイの『戦争と平和』に代表される、対立を止揚した西欧の戦争文学は、叙事詩の系譜とは明らかに別であった。日本の

いくさの物語は、世界の戦争文学という、より広い視野のなかで再評価されなければなるまい。

注(1) 生田弘治(長江)「国民的叙事詩としての平家物語」(『帝国文学』一九〇六・三・五)。岩野泡鳴「叙事詩としての『平家物語』」(『文章世界』一九一〇・一一)

(2) 主として歴史社会学派と称された研究者(永積安明氏ら)によって推し進められ、現時点でもその影響が強いことを、大津雄一氏「『平家物語』とロマン主義」(『軍記と語り物』43「二〇〇七・三」)が論じている。

(3) 宮川昇氏「『平家物語』と西洋古典叙事詩」(『比較文化研究』1、3、5「一九八〇・八二、八五」)は、表現形態の類似性を以って積極的に「平家物語」を叙事詩の範疇に加えようとするが、以下で論ずるように、そもそも表現衝動の初発段階で一線を画していよう。なお、同氏は、『ロランの歌』等は武勲詩であって叙事詩ではないとしているが、ここでは一九八五年刊『平凡社大百科事典』菅野昭正氏執筆「叙事詩」項に従い、叙事詩として扱った。佐藤輝夫氏『ロランの歌と平家物語 後編』(中央公論社・一九七三)は、叙事詩として両作品を比較しているが、語りの表現手法の共通性に主眼が置かれた論で、同一ジャンルに属するか否かに関する問いかけはない。